



LA FLAMBEE

Henri De Régnier

CONFESSION DE MINUIT

Georges Duhamel

譯學大口堀 作 エニレ

春 青 る 上 え 燃

譯湖星村中 作ルメアユデ

白 告 の 夜 深 部 樂 俱 エ ネ オ リ

エ ニ レ

ル メ ア ユ デ

版 出 社 潮 新

第二期

世界文學全集(3)

燃え上る青春
深夜の告白
リオネエ俱樂部
第九回配本

昭和六年三月十日印刷
昭和六年三月十八日發行

翻譯者

堀口大湖
中村星湖

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

五

八八八八八

〇〇〇〇〇〇

九八七六五

番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

解 説

一、レニエとその作品

Henri François de Régnier は、一八六四年十二月二十八日、佛國カルヴァドス縣のオンフルールの地に生れた。家は十六世紀頃からすでに代々著名の人士を輩出した舊い家系である。七才の時、彼はその家族と共に巴里に移り住んだ。父は收税官だった。一八七四年、スタニスラ中學^{コレージュ}に入學。一八八三年大學入學資格を得、次いで家族の希望にそふ爲め、大學に法科の課程を修め、卒業後、外交官試験に應じて及第したが外交官にはならずにしまった。一九一一年、選ばれて佛國翰林院の會員に列し、壯なる創作力を保つて今日に及んでゐる。

レニエは最初詩人として現はれた。彼は、すでに中學生の頃から自然な氣持に導かれて、しきりに詩を書いてゐた。彼には殆んど詩人としての習作時代がなかつたと云つてもよい程である、何故なれば、一八八五年のその處女詩集“Les lendenais”（翌日）、及び一八八六年の第二詩集“Les apaisements”（慰安）に於いてさへ、讀者は、堂々一家の風格を備へ、且つ完成された詩品に接するのであるから。その後、今日まで、彼はおびたゞしい量の著作をなしてゐる。

詩人としてのレニエは、サムボリズムに屬してゐた。彼はこの流派の内部の詩人からも、また外部の讀者からも最も賞讃され、最も愛讀された第一人者であつた。彼はシェウリイ・ブリュウドナムの友として、パルナシアン同感を得

ると同時に、またマラルメの忠實なる弟子だつた。彼はまた、當時の佛國文壇に君臨してゐた雜誌メルキュール・ド・フランスの重要な寄稿家であると共に、かの「トロフエ」の詩人エレデアの女婿だつた。即ち詩人としてのレニエは、相反する二つの流派の賞讃を身に集めたのであつた。それかあらぬか、彼が受けた感化影響も亦二重だつた。一方、彼の自由詩は、この流派の代表的佳調であるが、詩集「Médailles d'Argiles」(粘土の彫牌)の中の數篇のソネはバルナシアンバルナシアンの筆法で書かれてゐる。彼はまた自分でマラルメの弟子だと云つてゐるが、彼の作品にはしばしばエレデアの影響が認められる。

レニエは天の成した詩人であり、文人である。彼は書かずには居られないで書くのである。自分の罪を神の前に懺悔して始めて安心立命を得、心の平靜をとりかへず、かの善きカソリック教徒のやうに、レニエは書かずにはゐられないのである。このことは、彼自らも告白してゐる。「詩は放デリゲランヌ釋である」と云つたゲーテの言葉は、レニエの場合には眞理である。

レニエが吾等に教へる哲學は、人は人生にあつて、他人をよるこばせる爲めに美しいものを創造し、戀愛を愛し、また他人をして戀愛を愛するやうに仕向けなければいけないと云ふに終始してゐる。だから彼の詩にあつては、その主題は殆んど常に、夢をさそふ美しい風景であり、涙を誘ふ思ひ出であり、愛すべき美しい女である。レニエにあつては、どうやらその藝術までが、美女の姿で現はれるやうな氣がする。

二十世紀の初頭、佛國文壇に、著しい一つの現象があらはれた。それは詩人の作になる小説の流行であつた。これ等の作家は、普通の小説家と異つて、單に物語の筋の眞實を傳へようとする許りでなく、それと同時にまた彼等の心

の中に育はぐまれた夢想を、彼等の心に巢食ふ感情を、彼等が憧がれる幸福を表現しようとするのを、その特徴とした。サマンヤ、ショオブヤ、グウルモンヤ、ビエール・ルキスの作になる小説やコントが、この種の文學の顯著なる例である。

これ等の作品に接して、最も驚かれることは、その作風の極めて藝術的であることである。完全な語法、美しい文章、詩的なファンタジイ、及び現實の生活に於いてわれ等が經驗する實際以上に多くの感情と、情熱と思念とから、この種の小説は成つてゐるのであるが、これだけの要素は、實に貴重な作品を成就するに十分なのである。そして、レニエの作品は、これ等の詩人小説家の小説の中で最も優れたものであり、最も代表的なものである。

小説を書く場合にも、レニエは常に詩人である。讀者は、彼の小説の第一頁から、あきらかに感じるのである、「これは、自分の悦びの爲めに、自分の幻を描いてゐる詩人の作品である」と。讀者を樂しませることは結果であつて、目的ではない。だから彼は、小説作法のあらゆる規則を平氣でふみにじる。爲めに彼は部分部分エピソードの興味興味の爲めに、全體のコムボジションを犠牲にするやうな場合がしばしばある。然し、それ等の場面場面が、比類のない美しさを備へて描き出されてゐるので、讀者は作者に向つて、抗議しようと思はない。物語の筋も、極めてロマネスクであつて、そこに描かれてゐる眞實も、現實の眞實であるよりは、むしろ詩人レニエの心の中の眞實であると云ふ可きであらう。

それかあらぬか、楽しい小説、味のゆたかな小説として、私は今日まで、まだレニエの小説以上に豊富なものに接したことがないと思つてゐる。永井荷風先生もかつて、「若し余をして現時海外著名の文學者の中余の心酔するものを擧げしめんか。余は先指をレニエに屈し此につぐにアナトール・フランス並にアンドレ・ジイドの二家を以てすべ

し」と書いてゐられる。

こゝに譯出した『燃え上る青春』(La Flamée)は、一九〇六年に成り、レニエの才能の圓熟期の作品であつて、これを彼一代の傑作なりと評價する批評家も少なくないほどの名作である。

“Premiers poèmes”(第1詩集)、“Poèmes”(詩集)、“Jeux rustiques et divins”(野趣神趣)、“Les médailles d'argent”(粘土の彫牌)、“La cité des eaux”(水の市)、“La sandale ailée”(翼ある草鞋)、“Le miroir des heures”(時の鏡)、“1914—1916”(一九一四年—一九一六年)、“Vestigia flammæ”(殘灰)以上詩集。

“La canne de jaspe”(碧玉の杖)、“La double maîtresse”(二重の戀人)、“Les amants singuliers”(妙な戀人)、“Le bon plaisir(御意S. # 1)”、“Mariage de minute”(夜半の結婚)、“Les vacances d'un jeune homme sage”(或の青年の休暇)、“Les rencontres de M. de Bréot”(トノハ氏の色懺悔)、“Le passé vivant”(生ける過去)、“La peur de l'amour”(戀の怖れ)、“Coulure du temps”(時の色)、“La flamée”(燃え上る青春)、“L'Amphisbène”(兩頭の蛇)、“Le plateau de laque”(漆の盆)、“Romaine Minnault”(ロオメヌ・ミナウルト)、“L'Illusion héroïque de Tito Bassi”(チ・オ・ベッシの英雄的空想)、“Histoires incertaines”(やだかならぬ物語)、“La pécheresse”(罪の女)、“Les bonheurs perdus”(失はれた幸福)以上小説。

その他、脚本、評論、隨筆等。(以上、堀口大學)

二、デュアメルとその作品

デュアメルは現存の人だけに、まだその詳しい傳記は書かれてないし、(あるかも知れぬが、自分は読んでゐない) ビエール・アンブールの『ジョルジュ・デュアメル』の最初に引かれてある、かれの自叙傳を見ても、簡單過ぎて、細かい事は知るよしもない。従つて、極大ざつぱであるが、かれの傳記をまづ語つて置くことにする。

デュアメルは一八八四年に生れた。かれの父親は、デュアメル自身の記す所によると、「百姓の孫」だといふから、二三代前までは純然たる農民、田舎者だつたに違ひない。だが、父親はその生涯の大部分を商業上のつまらぬ仕事でこき使はれる使用人として送り、普佛戦争の前に巴里に出て来て、結婚してから、つぎ／＼に藥草販賣人になつたり、藥劑師になつたり、やがて、四十五歳の頃に、醫學の勉強を始めた。貧乏で子澤山で(八人あつた子供は半分死んで、ジョルジュ・デュアメルとその姉と二人の弟だけが残つた)仕事を次から次へと變へるし、居所をもあちらへ移し、こちらへ移したために、(父親はデュアメルが知つてゐるだけでも四十回も引越しをしたといふ)デュアメルは小學校の勉強をも正規に済ますことは出来なかつた。「私の知識の殆んどすべては貧乏から來てゐる。」とも「自分の子供にはあんな苦勞はさせたくない。」ともデュアメル自らが書いてゐる通り、デュアメルの少青年時代のかれの家の貧困は、骨に徹する程のものであつたであらう。

一九〇〇年に、父親が五十一歳で、醫科大學を卒業して(何といふ晩學、だが何といふ奮發!)二年たつと、息子のデュアメルがその同じ醫科大學へ入つて行つた。それまでのかれは、「區から區へ、町から町へと、いつも親父の放浪癖に曳きずられて轉々としてゐる間」に不規則に、斷片的に小學校の教育を受けたので、かれが父と同じやうに醫者

になる志を立てた時には、かれは小學校の教育から受け直さねばならなかつた。もうそろ／＼大人になりかける年齢をして、鼻汁垂らし小僧共と一緒に、出来るだけ短かい期間に、出来るだけ多くの知識を受け容れようとしたかれのけなげさ！ それは、四十五歳で醫科大學へ入學した親父にもまして、悲壯なものだつたに違ひない。

デュアメルは子供の頃から文學が好きだつた。けれども、家計の困難はかれをしてその好める道だが何時になつて收入があるか解らぬ道に進むことを得させなかつた。「職業としては醫學を、趣味としては文學を」併せて勉強しようといふ氣持をかれがはつきり持つ頃には、同じやうな考への青年が、かれの周圍に幾人かあつた。あれ程に文學藝術の尊ばれるフランスであるけれども、文學藝術に依つて直ちに衣食の資を得るといふ事はやはり困難だつたからである。縁あつてデュアメルの姉を娶つたヴィルドラックは、當時、或る辯護人の書記をしてゐたが、これは仲間のうちで、一番年嵩でもあり、世間的の經驗もあつたので、自然、仲間の中心となつた、そして、文藝復興期の學僧ラブレールがその作品のうちに描いた、「テレームの修道院」のやうなものを、この世に打建て、生活と藝術との一致を計らうといふヴィルドラックの空想は、それ／＼實生活の羈絆に苦しみながらも、文藝愛好の心を棄て得ない青年たちの共鳴を得た。

「こんな巴里の墮落した空氣の中では、本當の詩は生れない。自分たちは、田舎へ引籠つて、僧侶のやうな精進をして、生活をも營み、藝術をも作らなくてはならない。」

これが、ヴィルドラックを初め五六人の同志の氣持だつた。そして、かれらは巴里から東南へ十二三キロメートル（日本里程で三里餘）距たつてゐるクレテイといふ村に恰好な貸家を見付けて、そこを「修道院」と呼んで、印刷業を始めた。自分たちの作物をも出版するし、よそからの仕事をも引受けた。シャルル・ヴィルドラック、ルネ・アルコス、アンリ・

マルタン、アルベエル・グレーズ、ジョルジュ・デュアメルの五人が創立者だつたが、後に、ジュール・ロマンその他が加はつた。かれらは、それと書記、裝飾畫家、醫學生、政治家などであつたが、印刷の熟練工を一人師匠に頼んで来て、印刷業を習つたのだつた。この事業は二年ばかりで失敗に終つたが、かれらの集團は、所謂「修道院派」としてまづ詩の方面に頭角を現はし、やがて、劇や小説の方面にも發展して行つたのである。

さて、デュアメルである。かれは醫科大學を卒業して外科醫となつたが、相變らず文學の鑑賞と創作とを棄てず、詩人として可なり認められるやうになつた。やがて、歐洲大戰が起こつた。かれは軍醫となつて従軍した。あの空前で恐らく絶後であらう大戰の慘澹たる光景、殊に、その病傷兵の酸鼻の生活は、心やさい（この一語は、かれの性格を言ひ表はすに最も適してゐると思ふ）ドストエーフスキイを思はせるやうなデュアメルを深く動かさずにはゐなかつた。『殉難者の生涯』は即ち、かれの従軍記で同時に立派な藝術品である。詩人としてのかれは夙に認められてゐたが、散文家、殊に小説家としてのかれが世間から認められたのは、この作及び、次いで現れた『シヴィリザシオン』（文明）に依つてである、と言つてよからう。等しく戦争文學で有名になつたのではあるが、アンリ・バルビュスなどに比較すると、デュアメルの方が、藝術家としてずつと優れてゐるといふ定評がある。

その後のかれは、小説方面に、その異常な精力を發揮してゐるが、かれの作品として殊に有名なものは、『サラザン物』と言つて、ルイ・サラザンなる一人物を主人公とする連續小説である。私の讀んだ限りでは、『深夜の告白』を初めとして、『二人』、『サラザンの日記』、『リオネエ俱樂部』等はすべてサラザンもしくはその周圍、友人關係等を取扱つたものである。

かれには、幾多の小説の外に、詩集、戯曲、及び詩に關する評論がある。

私がこゝに譯出したのは、『深夜の告白』と『リオネエ俱樂部』とであるが、この二つを選んだ理由は、前者が所謂「サラザン物」の最初の作であるばかりでなく、デュアメル傑作として名高いものだからであり、後者が「サラザン物」の最後のもの（この後、まだサラザンの物語は續くであらう、）で、デュアメル最近の傾向、本來の人道主義的傾向からプロレタリア的傾向に變りかけてゐることを窺ふに足りるものだからである。

『深夜の告白』は或商會社に勤めてゐるルイ・サラザンが、ちよつとした神經の狂ひから、といふよりは、かれの空想癖から社長兼取締役の位置にある人の耳たぶに人差指をふれた、その一見、ふざけたやうな、とぼけたやうな小さな事件が動機となつて、免職になる、それから後の、失業者らしい苦悶や焦燥だけに重きを置くと、一種の「失業文學」であるけれども、この失業はサラザン個人の性格に原因を持つてゐるので、社會問題としての失業ではない。使用人が雇主に對する漠然たる反感、または貧乏の精細な描寫などは、明かにプロレタリア文學としての要素を備へてゐるけれども、作者の見方はむしろ、さきにも言つた、ドストエーフスキイなどにある、人道的、宗教的の愛を基本としてゐる。殊に、作者は醫學の専門家であるだけに、主人公の肉體及びそれに包まれてゐる神經の疾患を深く見透してゐて、それを憐れんでもゐるし、批評してもゐるし、楽しんでゐる、といふ事が出來よう。これはドストエーフスキイにはなくて、デュアメルにある所で、所謂デュアメル「人間研究」なるものが、單に心理的ではなくて、同時に肉體的であつて、それが意識してか、意識せずにか、フロイドの「精神分析」と一脈相通するものがあるやうにさへ思はれるのである。

一人の青年が、ふとした出來心からブルジョワの肥大漢の耳朵に人差指を觸れたといふ事は、まづ、非常に肉感的であ

る。そして、それを行つたサラザンは、自ら「あまり神經質ではない」と言ひながら、神經ばかりで出来てゐるやうな人間であり、精神的に生きようとする努力をしてゐる人間である。この人間が、色々な心のはぐれから、遂に親友の妻の腋の下を瞥見した際に、（このあたりは殊に肉感的である、さきに重役の耳朵に觸れた事と、この最後の空想とは、自ら連絡してゐると見なければならぬ、作者の意圖も恐らくさうであらう、）かれはかの女を犯すことを空想する。かれに取つては空想も現實も同じである。罪の自覺に堪へられなくなつて、かれは友人の家を飛び出し、自分の家をも離れ放浪者となる。

筋はこれだけである。嘘のやうな本當、本當のやうな嘘。肉のやうな精神、精神のやうな肉、空想のやうな現實、現實のやうな空想、これら二つの對照物が到る處に縋ひ交ぜられてある。だから、作から受ける印象は、非常に悲慘であつて、同時に非常に滑稽のやうな場合が多い。デュアメルには、ユモリストの資格があると、私が思ふのはその爲めである。

作の主人公が好んで吹いたといふ一本の木笛、單純ではあるが、複雑な音色を發するその木笛のやうな感じを、讀者はこの作から受けるであらう。

これは恐らく、デュアメル作中の傑作であるばかりでなく、フランス現代文學中の白眉かと思ふ。

次に、『リオネエ俱樂部』に就いて少しく述べるならば、この作が發表されたのは一九二九年で、デュアメルがソヴィエツト聯邦の革命十周年記念祭に参加した後の作品である。この作でも、やはりサラザンが主人公であるが、然し、ここでは特に一人の人物に重きを置くのでなくて、軌直シルグラーンの家に集まる人々のそれ／＼を活躍させてゐる。こゝでは作者の見方は、明かに社會的になつて來てゐる。個人の性格を取扱ふにも、貧乏や、病氣を取扱ふにも、さ

うである。

ルグランは、舊式の革命思想を抱いてゐるとは見られるが、まさしく無産階級を代表してゐる、(かれの名前はレグランと發音すべきだといふ説もあるが、ルグラン即ち「種子」といふ意味を持つた言葉として、さう發音して置く、そのわけは、オーフレールには「友人へ」、フォンテーンには「泉」、ボオヴォワザンには「美しき隣人」の意味があるのを見て、作者が靴直しの名前にも、「種子」の意味を持たせたであらうと察するからである。) サラザンは、プロレタリアではあるが、知識階級に屬し、オーフレールは富裕な知識階級、ドゥヴリニイはブチ・ブルジョワ、フォンテーン及びザキンの別名を持つたオブツイニイは共產主義者、パウルはその主義に共鳴する新聞記者。およそこれらの人々が、靴屋の店に集まつて、いろいろ思想上の話をしたり、戀愛をしたり、またある者は、政治上の陰謀を企てたりするのである。

右の二つの作品に現れる女性のおもなものは、サラザン老夫人、マルグリット、リオネエ俱樂部の女タイピストであるステファニー、ルグラン老人の娘エレイン等である。これ等の女性を通じての特色は、すべて可憐といふことである。新時代の女で、主義のために貞操などは物ともしない風のステファニーは別として。

殊に、慈悲の權化、母性の神化とまで見られるのはサラザン老夫人で、(この人の親心の深さは、男ではルグラン老人と比較すべきであらうが、)この年寄りの子供に對する愛の深さ、しかも最上の智慧を伴つた愛の尊さには、全く涙ぐましくなるものがあるとは、この翻譯の書物になるまでに種々心を添へられた新潮社調査部長金子薫國氏の言葉である。私は全く同感である。かういふ年寄を見ると、外國人とは思はれない。日本の最も善い女性の中に、たまた

まこれに近いのを見出す。そして、これはデュアメルデュアメルの告白によれば、かれの母親をモデルとしたものらしい。

マルグリットマルグリット、初めはサラザンサラザンの戀人で、つひにその妻となつたマルグリットマルグリットもよく書けてゐる。殊に思索を楽しむ人間を夫とした、平凡な女の苦しさ、憐れさを代表してゐる意味に於てだ。恐らく、これはもとの喜劇女優で、デュアメルデュアメルの妻となつたブランシュ・アルバンブランシュ・アルバンの面影ではあるまいか？

かういふ穿鑿を進めてゆくと、サラザンサラザンはさしづめ作者デュアメルデュアメルの全面貌を傳へてゐないまでも、性格的には餘程似てゐさうである。すくなくとも、サラザンサラザンはデュアメルデュアメルの最愛の人物に違ひない。

デュアメルデュアメルの文章については色々實例も引きたいのだが、讀者は本文に就いて味つてくれるであらうから、引例なしで、簡単に言つて置かう。

デュアメルデュアメルの文章は、簡潔とは言へない。間々、長々し過ぎる感をさへ與へる。殊に會話などでは、言葉の繰返しが多く、諄いと見えることもあるが、すべて、もとゞ詩人である作者が、言葉の調子を重んずる所から來てゐると私は思ふ。地の文にも、可なり新しい詩的の表現がしてある、心理解剖の場合には、多少むづかしいと思はれる節もあらう。新潮社調査部の要求もあつて、出来るだけ平易にやつた積りであるが、私の到らない爲めに、珠玉の如き藝術品に幾分の曇りを帯びさせなかつたとは言ひ切れない。原作者及び讀者の寛恕を乞ふ次第である。

なほ、この翻譯について、語學上疑問の點に親切な解釋または助言を與へて下すつた瀧村立太郎先生及び齋藤一寛氏に感謝の意を表する。(以上、中村星湖)

目次

燃え上る青春……………	ド・レニエ作……………一
深夜の告白……………	デユアメル作……………二三
リオネエ俱樂部……………	同……………三九

カバーの繪……「燃え上る青春」の一八四頁の情景。

燃え上る青春

アンリ・ド・レニエ作
堀口大 學譯

ルネ・ボアレエヴに捧ぐ

一

曳かれた窓掛が、輾轉を滑る音に、眠を醒まされた時、アンドレ・モオヴァルは、直ぐには眼を開かうとはしなかつた。彼は長い一夜の安息も悉く拭ひ去ることの出来ぬやうな、若い者の眠たさで、なほも眼瞼の重いのを感ずるのであつた、出来る事なら、彼はよろこんでもつとく眠つたであらう。それと同時に、彼はまた、誰か知ら自分の寢室の中でこそくしてゐるのを、うるさい事に感ずるのであつた。何故、下男のリユールは、ブラシをかけるだけの衣服を、そつと取つて出て行く代りに、こんなまご／＼してゐるのかしら？　するとこの時、アンドレ・モオヴァルは燐寸を擦る音を耳にした。やがて彼は思ひ出した。前後彼の母が下

燃え上る青春

男にかう云つたのであつた、「明日の朝、若旦那のお室に襦袢をして上げてお呉れ、またそろ／＼寒くなつて来たから」と。すると忽ち、この青年の不機嫌が満足に變つて来た。彼は、なほしばらくして暖爐の火がよく燃えつくのを待つてから寢床から出ることにしようと思つた。さうして衣服を着換へる前に、暫く、脚あぶりをしてやらう。懶げに彼は壁の方へ寢返りを打つた。下男のリユールは室から出て行つた。小枝がば／＼と音を立てて燃え上つた。やがて乾いた薪の爆ける音が起つた。これは、ヴァランジュヴィルから、大きな袋に入れて、他の荷物と一緒に、持つて歸つた松笠が、燃えてはねる音だつた。リユールがそれを細かい木片と交せてくべたのであつた。

アンドレ・モオヴァルは寢床の上に腰かけて、二本の足をぶら下げたまゝ、陽氣な秋の樺火に眺め入つた。樺火は暖爐の中をその鋭い火炎と、生々した火花とで満してゐた。隣がたの松笠は樹皮と松脂の匂ひを立てて燃え上つた。彼の心の中には、海を見下す斷崖の上の小さな松林が浮ん

で来た、その林の中で、地の上に黄色く散り敷いた松葉の間に、彼自らが、これ等の松笠を拾つたのであつた。八月と九月の二ヶ月をそこで過して来たノルマンディ風の古びた莊園が彼の目に浮んで来た。それは叔母さんの、ド・サルニイ夫人の莊園であつた。それなのに今ではもう、暑中休暇は終つてゐた、彼はそれをかなしいことに思つた。已に十日以來、家人は毎朝早く彼を呼び起すのであつた、ヴァランジュヴィルにゐた時のやうに彼の朝寝を許さうとはせず。幸にも今朝は、母がこの陽氣な焚火をする事に氣がついたのであつた。懶惰な寢醒を勇氣つける爲めに、何物も、このものを暖める明るさには及ばなかつた。

彼は暖爐に近よつて、低い椅子の上に身を落ち着けた、すると彼は、自分の身體が極めて輕快な之感ずるのであつた。今では彼がヴァランジュヴィルを愛惜する心も少しは薄らいであつた。巴里にはさすがにいゝ處があつた。アンドレは其處で、自分に親しみのある書物を再び見出すことをよるこんだ。書物と云つても彼の學課用の書物では勿論なく、彼が其處に詩や小説や歴史や紀行文を読む種類の書物であつた。彼の法科の課業は——彼は三學年になつた所であつた——彼が欲するだけの餘暇を與へてゐた。彼は父を満足させる爲めに、講義に出席してゐるのであつた。さうして

試験を通過する爲めには、彼は専ら、復習教師のペルラン氏を當にしてゐるのであつた。試験の期日がいよいよ切迫して来た時になつてから、ペルラン氏の持つてゐられる多年の經驗を少々分配して貰ひに行けば足りるのであつた。その日の来るまではゆつくりしてゐればいゝのである。それは兎に角、家人の手前、時間までには身支度をすまして置いた方が都合がよかつた、尤も少し急ぎさへすれば、どんな時でも學校へは十分時間前に着けるとは云ふものゝ。彼位の年頃には、誰でも丈夫な脚を持つてゐるものなのだから。彼は自分の脚を眺めた。褶火の炎が其處に生えた毛をやや蒼色に見せてゐた。二本の脚は肉つきよく、頑丈に見えた。彼は兩脚の毛深い圓みの上を一種矜の感情をこめて撫で廻した。どのみち、彼はもう子供ではなかつた、彼はいつか青年になつてゐた。今日までの彼の生活は彼の家族のそれと密着してゐた、彼の二十四時の何れの部分も彼の家族のそれと切りはなされぬ程に。然るに今となつて、彼は少しづゝこの不斷の共同生活から遠ざかりつゝある事を感じるのであつた。元より彼はこの分離を強調しようとは思つてはゐなかつた、然し彼には、兩親もこの必要を享け入れて暗に承認してゐる事が感ぜられた。吾々の若き日に若しも義務があるとすれば、同時にまたそれには、權利も